笛吹市探訪

第52回 笛吹市の史跡⑪ 辻保順の墓

今回の笛吹市探訪では、春日居町国府の大中院（だいちゅういん）境内にある「辻保順（つじほじゅん）の墓」と辻家の歴史を題材にした小説「銀杏散りやまず」を紹介します。

辻保順は、寛延（かんえん）3年（1750年）に末木村（現在の一宮町）で生まれ、24歳の時に、国府村の辻次郎兵衛守方（もりかた）の養子になりました。

その後、保順は、末木村の生家近くに病院を開きました。家業のかたわら、天明（てんめい）8年（1788年）に国学者の本居宣長（もとおりのりなが）の門弟になり、日本の古典文学等について指導を受けていました。

辻保順墓地看板

また、保順は、「春秋」と題した日記を、寛政（かんせい）12年（1800年）から文化元年（1804年）にかけて残しています。日記を読むと、毎日往診に出かけ、忙しかった保順の様子が分かります。

日記「春秋」は、辻家文書459点のうちの一つとして、山梨県立博物館に保管されています。

医師・国学者として活躍した保順は、文化7年（1810年）、61歳で亡くなりました。

保順の墓は国府地内に建てられ、裏面には辻家の歴史などが刻まれています。

平成15年には、保順の墓がある辻家の墓地は、現在ある大中院境内に移されました。

辻保順の子孫である辻邦生が辻家の墓地を訪れたのは、昭和56年のことです。

邦生は、本籍地である国府地区を訪ね、辻家の墓参りをしたり、辻家文書などを調べたりしました。その成果は、小説「銀杏散りやまず」として、昭和57年から翌年まで雑誌「新潮」で発表されました。

辻家の墓地現状（国府大中院境内）

「銀杏散りやまず」には、辻家の祖先である「三枝氏」の歴史、武田家の家臣であった辻氏の活躍、辻保順のことなどが紹介されています。

辻邦生の作品としては、「安土往還記」・「西行花伝」などの歴史小説が有名です。しかし、「銀杏散りやまず」は、有名な主人公が活躍する歴史小説ではなく、邦生が、辻家の起源を調べるために故郷である国府地区を訪れ、保順の墓や辻家文書などと出合う様子を描いています。

皆さんも「銀杏散りやまず」の舞台になった辻家の墓地を訪ねてみてはいかがですか。

移築前の辻家墓地（辻邦生が訪れた頃）